

会議議事録

議事記録者：鮎川幸乃

会議名	令和4年度 第1回学校関係者評価委員会
開催日時	令和4年7月5日 火曜日 18:30~20:00 (1時間30分)
場所	マロニエ医療福祉専門学校 3号館 視聴覚室
出席者 (敬称略)	<p>①評価委員</p> <p>北條 豊 (合同会社あゆみの森 代表社員) 川村 祐也 (医療法人常盤会 緑の屋根診療所) 須藤 智宏 (医療法人心救会 小山富士見台病院) 渡邊 芳江 (公益社団法人 栃木県看護協会 常任理事) 中里 佳純 (大澤歯科医院) 茂木 明男 (MO 後援会 会長) 日原 芳行 (マロニエ同窓会 副会長)</p> <p>(計7名)</p> <p>②学校教職員</p> <p>羽山 潔、(マロニエ 校長)、伏木克行 (小山歯科 校長)、 宮内 修 (司会、マロニエ/小山歯科 統括部長)、 赤坂宏美 (統括部長補佐/助産学科長)、矢口 剛 (リハビリテーション学部長)、 今井貴子 (看護学科長)、金久保 浩 (介護福祉学科長)、栗田礼子 (歯科衛生学科長)、 絹谷幸男 (事務局長)、小林秀子 (学生サポートセンター長)、山田宏美 (広報課長)、 鮎川幸乃 (学校評価事務局、総務課)</p> <p>(計12名)</p>
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> 令和4年度 第1回学校関係者評価委員 次第 (事前配布) 令和3年度自己点検・自己評価結果 (事前配布) ビジョン委員会 令和4年度の取り組み予定
進行 議題内容 各詳細は 別紙の通り	<p>1. 開会 (挨拶、配布資料確認) 開会が宣言された後、配布資料の確認と出席者の自己紹介を行った。</p> <p>2. 出席者紹介 (評価委員、学校教職員) 各出席者の自己紹介が行われた。</p> <p>3. 校長挨拶 羽山校長より開会の挨拶が行われた。</p> <p>4. 学校関係者評価の進め方説明 本会の進め方の説明が行われた。報告書は事前配布のため、その場での読み上げは行わず、内容に対する質疑応答を行う旨が伝えられた。</p> <p>5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明 報告に対する質疑応答及び補足説明が以下の順に進められた。(別紙1) 委員による下記以外のその他意見等は、別途「学校関係者評価報告書」に記載する。</p>

1. リモート授業について
2. 看護学科の教員数ならびに学生への指導体制について
3. 既卒の国家試験対策について
4. オープンキャンパスからの入学について
5. (5) 学生支援 について
6. (7) 学生の受入れ募集 について

6. 令和4年度重点課題について

赤坂統括部長補佐より今年度のビジョン方針・重点施策等（別紙1）が説明された。
説明の最後に IPE の授業風景紹介動画（約3分）の紹介、視聴が行われた。

7. 意見交換と学校関係者評価の総評

委員会全体を通しての意見交換（別紙1）が行われた後、伏木校長より総評が伝えられた。

—閉会—

5. 自己評価結果に対する改善と現状報告 質疑応答及び補足説明

1. リモート授業について

【委員からの質問】

- ・リモート授業は現在行っていますか。実技などはどのように伝えていますか。（須藤）

【回答・補足】

- ・リモート授業は現在でも一部の非常勤教員の科目で実施しているが、全体で2科目程度、座学の科目であり、演習・実技の科目は全て校内で実施している。（宮内）

2. 看護学科の教員数ならびに学生への指導体制について

【委員からの質問】

- ・教員が減ってしまうと学生への指導が行き届かない可能性が考えられます。具体的にどのような対策をとっていますか。（川村）

【回答・補足】

- ・教員は欠員が出れば都度補充し、欠員のない状況で学生指導に対応できるよう努めている。令和4年度は新任教員が3名入職したが、オリエンテーションや教員研修を設けた。研修は授業案作成、学生指導のあり方と注意点などを説明した。現在、進行中で報告、相談、連絡を受けている。（今井）

3. 既卒の国家試験対策について

【委員からの質問】

- ・前年度、国家試験不合格だった学生への今年度の指導について、どのような対応をしていくのか。（中里）
- ・今まで不合格を何度も繰り返している学生は多いのか。合格するまで何年も学校で指導をしてくれるのか。（中里）

【回答・補足】

介護福祉学科

- ・介護福祉学科は、養成校卒業生に対する国家試験の経過措置期間であるため、再受験はせず、就職して勤続5年間で資格を取得することを推奨している。また、現実問題として介護福祉士の場合、人材不足のため就職したら資格の有無に関わらず即戦力とみなされ、勉強の時間を確保することは難しく、就職先の国家試験受験の支援体制も含めて、再受験での合格は厳しい。（金久保）

作業療法学科

- ・昨年度の不合格者は2名。現在は2週間に1回登校してもらい、指導を行っている。なお、過去不合格者のうち半数ほどは再受験を選んでいない。（連絡が取れないものも含む）
- ・また、作業療法学科では学科開設以来、不合格者に対して継続して、以下のサポートを行っている。（矢口）
 - （1）定期的な個別面談ならびに電話、メールなどによるサポート
 - （2）（1）を通じての、学習（国家試験対策の）サポート
 - （3）学外模擬試験の受験サポート

- (4) 国家試験出願から受験迄のサポート
- (5) 合格後の免許申請迄のサポート
- (6) 合格後の就職迄のサポート（就職面接の練習、出願書類、小論文・作文対策など）
- (7) 新型コロナ感染症の流行拡大前迄は、概ね、月に1回（夜間）のグループでのサポートも行ってた（現在、休止中）。

理学療法学科

- ・前年度不合格者の1名について、現在週1回の個別フォロー中である。課題と進捗状況の確認を実施している。
- ・国家試験合格率は受験を重ねるほど低下する傾向がある。基本的には本人の受験意志がある限りフォローはする。しかし不合格となってしまう原因（生活状況も含む）を把握した上で対応をしないと同じことを繰り返すため、その点が変わらない（変えられない）学生への対応は困難である。（矢口）

看護学科

- ・卒業生の受験希望の有無を確認し、希望であれば在学生と同じ模擬試験を受験していただく。その際、学習の進捗状況や予備校の紹介、悩みなどを傾聴する。また、国試受験手続や合格後の免許申請のサポートも在学生同様行っている。
- ・2年目以降の卒業生の希望者はほとんどいないが、希望があれば上記の対応を行っている。
- ・また、希望者は卒業前に准看護師の資格試験も受験しており、国家試験が不合格だった場合でも准看護師として働いている場合もある。（今井）

→一般的に既卒の合格率は非常に低くなっている。いかに新卒で合格させるかが先生方の苦慮されている点であると感じている。

ただ、准看護師の資格が取れた場合、それが一つの区切りや安心感になってしまい、看護師国家試験受験の（モチベーション維持等への）デメリットになってしまわないかが気になる。

（渡邊）

→指摘頂いた点は教員側としてもそれで良いのかというジレンマを感じている。しかし、不合格になってしまった学生も准看護師として病院に就職できるという、学生教員相互の安心感があるということも事実である。引き続き対応の在り方というものを検討していきたい。

（今井）

→リスクマネジメントというよりは本試験へに向けての試験慣れとして捉えている学生が多いと聞いている。保護者の立場としては、准看護師の希望受験もこのまま継続で良い気がしている。（茂木）

→学校全体で、学生に入学時から国家資格を取得することの意味や価値を伝える努力をしている。これからも継続していく必要があると感じた。（赤坂）

助産学科

- ・自己採点段階から不合格点が見込まれてしまう学生には早期アプローチ開始。（精神的フォローと就職の確認、今後について）

4月：再受験の意思を確認し、受験までの計画を共有、模試等の申し込み

5月：就職先への適応を確認

6月：　　　　　"　　　　　　　　　　　、生活状況・学習状況を確認、学習体制を整えるよう促す

7月：校内模試（頻出問題）　出来高と苦手分野を確認

学習計画・方法について確認、学習習慣が確立することを目指す

9月：過去問模試 模試分析（在学中に使用したシートを活用）
解き直しを中心に苦手分野を克服していく
不明点については登校し解決の場を作る

模試終了後に実施

10月：模試①

11月：過去問模試

12～1月：模試②～⑧

2月：助産師国家試験

※必要時登校し、教員が直接対応する機会を設ける。

- ・不合格ということが相当な精神的ショックとなるので、気持ちに向き合いながらも学習に集中できるように、伴走するような姿勢で支援を行うよう努めている。
- ・これまでの既卒者対応は2名でいずれも1回で合格している。もし再度不合格となった場合は、本人の受験意思がある限りは支援を行う。（赤坂）

歯科衛生学科

- ・前年度、不合格者は1名。該当学生に関しては、引き続き学校で国試に関する対応は行う。具体的には、定期的に課題を出し、学校に来てもらい確認する。また、模擬試験に関しては、受験希望がある場合は学校で取りまとめて一緒に受けてもらう。
- ・不合格を繰り返す者は、2回受験して不合格だったものが過去に2名ほどいた。そのうち1名は3度目の受験で合格した。歯科助手をしながら、勉強を継続していくため、モチベーションが下がらないよう声掛けをしている。本人に国試受験の意思があれば、合格まで指導していく。
- ・既卒性が歯科助手として働いている場合、ありがたいことに、中には受験勉強の時間を確保していただける歯科医院もあり、連携して対策を取ることができている。（栗田）

4. オープンキャンパスからの入学について

【委員からの質問】

- ・オープンキャンパスに来た方のうち入学につながるのはどの程度ですか。
（入学生の内訳でも良いです。「入学先に選んだ理由」のようなもの）（日原）

【回答・補足】

- ・本校を選んだ理由は以下の通り。（山田）
 - ・体験入学に参加して内容が良かったから
 - ・学校説明会に参加して内容が良かったから
 - ・多職種連携授業を学ぶことができるから
 - ・地元の専門学校であるから

他

5. (5) 学生支援 について

【委員からの質問】

- ・Q7の評価が「4」となっているが、「(4) 学修成果 介護」において、「課題」「改善方策等」で「保護者との協力体制が築けない場合もあり・・・」「理解を得られていない・・・」と記載があった。ここの項目の評価基準を教えてください。（日原）

【回答・補足】

- ・(5) 学生支援 Q7 は、下記の観点の評価基準として評価を行っている。
 - 保護者会の開催等、学校の教育活動に関する情報提供を適切に行っているか
 - 個人面談等の機会を保護者に提供し、面談記録を適切に保存しているか
 - 学力不足、心理面等の問題解決にあたって、保護者と適切に連携しているか
 - 緊急時の連絡体制を確保しているか
- ・学生の多様化とともに配慮が必要な学生が増加傾向にあり、保護者対応において苦慮している場合もあるが、当法人としては積極的に保護者との連携強化に努めている。(小林)

6. (7) 学生の受入れ募集 について

【委員からの意見】

- ・Q1～4 の評価が4には疑問である。では、なぜ来年度募集停止学科（介護福祉学科・歯科衛生学科（夜間部））があるのか、説明を求めます。(茂木)

【回答・補足】

- ・状況として当該学科の過去5年の入学者数は減少している。介護は、全国的に希望者は減少傾向にあり、県内他校（主に単科）は留学生も対象とすることで入学者を確保している場合も多い。本校では複数学科を持っていることから留学生を受け入れるということのリスクを鑑みて日本人のみの受け入れとしている。夜間部は、開設時は主に歯科助手として働いている方から待望されており入学者を確保できていたが、近年はその数も減ってきている。今後も入学生の増加が見込まれないことから令和5年4月入学対象者から募集停止となった。(山田)
- それでは「評価が4」であることの根拠にはならない。募集成果が振るわないのに4ということに疑問がある。報告書の文章も評価の根拠（実施に対する成果）を説明しているとは言えない。(茂木)
- ご指摘頂いたとおりで、評価を実施するにおいて、募集活動の実施内容に焦点を当て、定員を満たしているかどうか（成果）という観点で点数をつけなかったことがご意見に繋がったのだと思う。真摯に受け止めさせていただき、次回の評価に向けて検討していきたい。(宮内)

6. 令和4年度重点課題について

ミッション：活躍できる人材を輩出することを目指し、学生一人ひとりに寄り添い、将来の仲間として育てるために、教職員が一丸となって取り組む

令和4年度 方針：「未来志向」 共有 協働 共創

重点課題：①チーム力のレベルアップ

②教育の質向上

(社会人基礎力、学生対応力、教育実践力、資格取得支援、教育の質全体)

③ブランド価値の再創造

7. 意見交換と学校関係者評価の総評

—意見交換—

- ・ IPE の授業風景の動画について、学生のうちから多職種連携について学ぶことはとても有意義なことだと感じた。ただ、動画で見る限りでは想定が病院の患者さんであり、今の学科構成をみると医療系よりになるのは仕方ないと思うが、福祉施設など生活の場を中心とした想定だと職種の関わり方が変わってくる。様々な場面を想定して授業を展開していただくと質が上げられると思う。学校としてはどれぐらい事例に幅を持たせているのか。(日原)

→事例は卒業学年の学生のレベルを考えて設定しており、事例づくりは IPE 委員会としてもかなり時間を取って行っている。

ご指摘の通り、入院と在宅では介入する職種のバランスが異なってくる。昨年度は患者さんの退院に向けてどのような準備が必要かというテーマで演習を行った。一昨年は在宅の乳がんの女性とその家族を設定したが、高齢の家族の脳梗塞・介護など設定を複雑にしすぎてしまい、展開が散漫してしまった場面がある。どうしてもそれぞれの職種を出そうとするとそのような傾向になってしまう。その中でも福祉や看護職は全体を統括してバランスを取るような立場になってくるが、事例としては幅を持たせるというよりは、それぞれの職種の強みが出せるような想定にせざるを得ないところに委員会としても苦心しているところである。(赤坂)

- ・ 重点施策として、教員のクリニカルラダー検討会を立ち上げていることが斬新だと感じた。先生方の経験年数や能力に合わせた目標設定や評価をどのように行うのか気になるところではあるが、導入すること自体が貴重なことだと感じた。臨床現場でも同じ経験年数で能力の違いがあり、その違いを何を物差しとして評価するのが課題である。検討会の今後の活動に期待したい。(渡邊)